※実際のコメントを文章化するにあたり、一部修正を加えています。

戦時中の生活はどのようなものでしたか。

私は昭和 16 年に小学校(当時は国民学校)に入学して、昭和 20 年 8 月の終戦まで、その間、1 年・2 年・3 年・4 年・5 年の半ばまで、全部戦時下で小学校生活を送ったんです。

1 年生のとき、太平洋戦争が 12 月に勃発したわけですけども、あんまり戦争だという強いイメージはなかったんです。

ところが、4年生の夏休みが終わった頃から、日本の戦局が非常に悪くなりまして、時々アメリカの爆撃機・B29 が上空に飛んでくるようになったんです。

その頃から生活は一変したように思います。

当時、私は都賀国民学校(現在の都賀小学校)で学んでいたんですけども、勉強をしても空襲警報があつたらすぐに勉強を止めて、防空頭巾(今の防災頭巾)を頭に被りまして、先生に従って防空壕へ大急ぎで・駆け足で・無言で避難をするわけです。

都賀国民学校は隣が鎮守の森(神社)で、そこと学校との境にずーっと U 字溝のような長い穴を掘りまして、そこへ一列に並んで子どもたちはじーっと屈んでいました。それが防空壕だったんです。

空を見上げる、B 29 の銀色の機体が見えたり、爆音が聞こえたり……。もう必死でじっと耐えている、怖い……。そんな生活が 5 年生の後半からずっと続きました。

空襲警報が解除されると、「良かった」ってことで教室に帰って、勉強の続きをするんですけども、さっきのことなんか全部忘れてしまいました。

その時、その時は一生懸命に取り組むんだけども、あんまり勉強に対する継続性と言うかそういうのがね、ちょっとショックが入ったりするからうまくいきませんでしたね。

それから、5 年生になると、食料がだんだんだんだん不足してきたんですね。お米も配給だし、着るものも全部配給だから。着るものはさておいて、食料がないわけですね。

園生の方に学校農園があつたんですが、5 年生は午後になると、みんなで並んで「勝ってくるぞと勇ましく」と、軍歌を歌いながら元気よく鎌や鍬を持って園生の農園に行つて、さつまいもを作つて秋になると収穫して。

でも私達は食べないんです。あのさつまいもは一体どこいつちやつたのかなと、今思えば不思議なんですけど、その時には収穫するだけ。作つて収穫する。そんな食料増産のお手伝いをした。そんな生活をしてましたね。

5 年生になつたころ、空襲は昼夜関係なく起こつていましたので、いつでも逃げられるように、夜は寝巻にはならないで、夏だからブラウスとモンペを履いてそのまま寝ました。

枕元には防空頭巾を置いて、「警報だー」となつたらさつとその防空頭巾を被つて、夜は家の防空壕に入つて……。そういうのがね、もう毎日のように続いていましたね。

空襲警報って、夜間に多いんですよ。だからゆっくりと眠つてられない。でも家の者が「空襲だ一起きろー。防空壕へー」と言うと、もう眠いのなんかわきに置いて、怖いから、ふっとんで逃げたこと覚えてますね。

勉強はうまくできない。いつも逃げていた。空を見上げて怖い思いをいつもしていた。

そんなのが生活でしょうかね。

七夕空襲があった日のことを教えてください。

昭和 20 年の 7 月 7 日の夜中から未明にかけて、空襲があったわけですね。

5 年生の 1 学期も始まって夏休みを迎えようとした頃でしたね。

その頃はもう夜となく昼となく空襲がたくさんありました。「またか、またか」って、ちょっと慣れっこになってるところもあるけども、一面では怖いんですね。

そういう日々の中で、東京大空襲が 3 月にあって、横浜もあったのかな・・・。

「千葉はなくていいなー」っていうことを友達と話したことを覚えています。

そうしたら昭和 20 年の 7 月 7 日、夜中の 1 時半ごろから 3 時過ぎまで約 90 分間、千葉市が空襲を受けました。

いつものように洋服で寝て、しっかり眠ってしまったところに、うちの家族が「空襲だー」と。

空襲の時は、サイレンが鳴るんですが、それが聞こえませんでした。

「空襲だから防空壕に入れー」と言って。

「またか」っていう思いで庭に掘ってあった防空壕に家族全員が避難をしました。

うちの家族は、祖父母(まだ 60 代だったと思います)と母、私が一番上で妹や弟がいました。

父はいるんですけども、ちょうどその時は召集されて東京の青山の近衛連隊で近衛兵としてお勤めしてたんですね。だからその夜はいなかったんですよ。

だから、おじいちゃんが家族を守る責任者みたいなもので、皆を仕切っていました。

母はまもなく赤ちゃんが生まれるような、そういう体だったんです。だから妹や弟はおじいちゃんやおばあちゃんが一生懸命面倒見ていたと思うんですけど。

とにかく家族全員が防空壕に入りました。

夜中ですから、私は眠いってのもあって、「早く解除になってまた布団に戻りたいな」っていうのが最初の思いでした。

防空壕の入り口は蓋というか戸というか、そういうものがあるんですけど、閉めちゃうとちょっと電気もないし、だから開けてあったんですね。

じっとしていると、すごい「ウーウー」とかっていう B 29 の爆音が聞こえるんですよ。

「うわー怖い」って。

祖父は、責任者だと思って防空壕に入らないで、外で辺りの状況確認をしていたわけですね。

当時、私たちは、今の市街地の辺りの賑やかなところを千葉って言っていたんです。

私は今の都賀駅からちょっと西の方の原町に住んでいました。だからちょっと高台なんですよ。

千葉の町はちょっと低いところでしょう？

私の家の方から千葉の町の方を見ると、煙は見えないけども空に茜色みたいな色がかかっている、赤く映ってるんですね。

それでおじいちゃんが「千葉の街が燃えているぞ。街がやられたに違いない」って。

初めての体験だったから、家族は外に出て見たんですね。

私の家から見たら西の方に当たるのかな。本当に夕焼けのように、炎は見えないけども赤く空が染まっているんですね。焼けているのかって判断はつかないけども、びっくりして「今夜は危ない」ってということで、また防空壕に戻ったんです。

その間、辺りの様子を見てると、その頃街灯もないうちの周りは畑が広がっていて、お家もポツポツしかなくて真っ暗闇なんですよ。

そんな中で、B 29 の「ウオーンウオーン」というすごい音と、それから焼夷爆弾が飛行機から落下してくるその様子を何本か見ました。

郊外だからそんなにバーツとはではないけど、パラパラパラパラと落としたんですね。

中には火を噴きながら上空から落ちてくるのもあって、それをみて、「うわーっ！」って。火を見たのがやっぱり怖かったですね。

火を吹くまでは行かないけども、発火しないまま地面に落ちたのも何本もありました。

それは戦争が終わってからいろんな人が畑の作業や田んぼの作業をやるときに「不発弾が見つかったよ。あっちでも見つかったよ」って話をしていました。それをいじって爆発しちゃって怪我をしたという話も聞いたことがあります。

とにかく、上空から焼夷弾がパラパラと落ちてくるんです。それを見ながら「ここで頭の上に落ちてきたらどうしよう」ってということで、防空壕へ逃げましたね。

どのくらいの時間が経過したかわからないけど、警報が解除にならないから、おじいちゃんはいろんなところの警戒をしていたんです。

そしたら「家がやられたー」って防空壕の中に向かって言うんですよ。

「家がやられた？なんだろうな？」って、ピンと来ませんでした。「燃えてる燃えてる」って言うんですよ。

さっきの落下する焼夷弾の一連の中の 2 発が、私の家の母屋の土間の中と土間の前にあった柿の木のところ落ちたんですね。

「爆弾が落ちて初めチョロチョロと燃えたら、見ていないで水で消さなければいけない」ということを消防団というのか、警防団というのか、そういう人たちからしっかりと教わっていたんです。だからどの家でも消火用の防火用水という、木やコンクリートの水を貯めた桶みたいのを置いて、そばに消すためのバケツを置いてあったんです。

うちの場合は、おじいちゃんが気がついて「火がぶわーっと出たところで、火のまわりが早くてもう消すことはできなかつたよ」て。

昔の家で木造の藁屋根でしたから。今のようなコンクリートかなんかじゃないからね、燃え方早かつたんでしょうね。

どうとう消火はできなくて、燃えるのをただただ悔しげに見ているだけ。

目の前で家がメラメラと燃えてるんですね。

昔の藁屋根で高さもあるし、それが真っ暗な闇の中に炎が「ファーッ」と上がっていくんですね、ゆらめきながら。それでびっくりしちゃってね、もう何も考えられない。ただ呆然と見ているだけでした。

「これじゃあもう解除になっても家には入れないんだから、防空壕に戻っているしかないよ」っていうことで、みんなすぐに防空壕へ戻ったんですね。

そこで見た光景は、おばあちゃんが一生懸命に、南妙法蓮華経を唱えたり、「神様仏様お助けください」って、一生懸命手を合わせていたりする姿。

弟や妹は疲れちゃって、たぶん寝ていたと思うんですけど、私は寝られなくて。

「頭が真っ白になる」って言葉をよく使いますが、そういう状況ですね。

「どうなっちゃうのかな。あれはもう絶対燃えちゃうなー。私は何にもなくなっちゃうんだなあ」とかいろんな思いを巡らせながら、朝までとにかくまんじりともしないで過ごしました。

途中で2回ほど外に出て、家が燃える様子を見ていました。焼け落ちてはいないけども、やっぱり勢いよく燃えていましたね。

朝、明るくなって改めて外に出てみたら、まだ柱とかそういう黒くなった色んな材木は残っていたんですけど、屋根はなくて全部落ちちゃって、要するに建物の形はなかったんですね。

ちょうど私の家はね、防空壕の正面に母屋があって、左端におじいちゃんとおばあちゃんの離れがあってね、農家だから牛も飼ってたんですね。牛舎も端っこの方にあっただけです。そういうのが全部焼けちゃった。「牛どうしたんだろう？」って思いましたね。

おじいちゃんが気を利かして庭の隅の方に連れ出して繋いどいてくれたから牛は助かったんですけどね。

とにかく朝見たら何にもなくなっちゃった。

その時に呆然としてしばらく見ている、「学校行く時どうするんだろう？」って、まず思いましたね。

「何にもない。私の持っているのはこのブラウスと今履いておるモンペと下駄と・・・これしかない・・・どうするんだろう？」・・・でも答えは出ませんでした。

弟は2年生だったんですけども、「母ちゃん、学校どうするんだ。教科書も本もないよ、ランドセルもないよ。買ってこい、買ってこい、買ってこい」って言ってるんですね。

「わかった、わかった」って(母は)言っただけなんですけども。

みんな、私と弟が学校に行くことをすごく心配していました。

隣の家は焼けなかったんですね。右隣が100M離れてるかな、ここも大丈夫。左の隣も100Mぐらい離れてこっちにあったんですけど、ここも大丈夫だったんですね。前にも家があったんだけど、前の家はちょっとブスブスと燻ったっていうか。そんな感じでね。

隣近所が焼けなかったからみんな色々と助けてくれて。

次の日は夢中で過ごして、何をどうやって過ごしたか覚えてません。

そういうことで家族は火傷もしないし命もちゃんとあつて。

この七夕空襲で、私の家は全焼しました。

右隣の家に同級生の子どもがいて、そのお母さんが「まさ子ちゃん、うちに来て今夜泊まりなよ」って言うてくれたんですね。

だから私は何日か、その子の家に行ってお風呂も入らせてもらったし、一緒に泊まることさせてもらってなんとかあったんですけどね。

しばらくしてから学校に行ったんですけども、当時の都賀国民学校(今の都賀小学校)を見たら「あ、校舎がない…。ほんの一部だけが残っていましたが、私たちが入っていた校舎は8割ぐらい焼けてなくなっていました。

そういうことで、七夕空襲は、家が全焼し学校もなくなり、裸になった一つの出来事でした。

〈作草部に住んでいた友人(女の子)の話〉

「作草部で空襲がひどくなって、隣までどんどん燃えてきて、危ないから『千葉公園に逃げよう』って皆で近所の人と相談して。警防団の人も『逃げろ逃げろー』って言ったから、妹と母ちゃんと私と3人で千葉公園に向かった。

途中で焼夷弾が近くに落ちてきてね、落ちたら油が弾の中から飛び散って、妹の体に当たっちゃった。

妹は油を浴びてどんどんそこから燃えていって、着ていた洋服が燃え出した。

お母ちゃんはね、自分の被っていた防空頭巾を外して、妹の燃えているところをビシビシパシャパシャ叩いて火を一生懸命に消したんだけども、大火傷をした。

千葉公園に妹を連れてって手当てをしてもらったけども、赤チンキやマーキュロをつけてくれるだけで、火傷の手当ては全然してくれない。『後でお医者さんに行きなさい』と言われてね。

朝になって家に帰ってきたんだけども、妹はね3つしか言葉を言わなかった。

『お母ちゃん熱い熱い。痛いよ痛いよ。最後にはね、お母ちゃん水が欲しい、水水』って言って、その3つしか言わないでね、次の日妹ね、死んじゃったの」って私たちに教えてくれたんです。

彼女の言葉、今も耳にしっかりと残っています。

返す言葉がありませんでした。彼女はしっかりお姉ちゃんだから言ってくれましたけど。

彼女の妹の話を聞いて、私も「あんなに可愛い2年生が8歳の生涯を終えちゃったんだ」って後で考えた時にね、とってもね、複雑な思いになりましたね。

終戦の日、どんなことを感じましたか。

終戦の日はね、天気の良い暑い日だったと思います。

当時はラジオしか情報はなかったんです、でも私の家は焼けちゃったからラジオがなかったんです。

隣の家の人がうちの親に「ねえ何か今日ね、大事な話が天皇陛下からあるってよ。あんたんちはラジオないでしょ。だからうちに聞きにきなよ」って言ってくれたらしいんです。

私の家族は何事だろうと思って。

父もいなかったから、日本軍がどうなってるかなんて情報はわからないわけですね、

まさか終戦を告げる玉音放送だなんて私の近くの人誰も想像していなかった。

みんなでその時間に隣の家に行ったんですね。

庭で聞いてたんだけどね、私は天皇陛下のお言葉が難しくて、何をおっしゃっているのかわからなかった。

なんといっても、ラジオの電波が非常に悪くてね、「ガーガーガー」音がしてね、話の音声がしっかりと聞こえてこない。「何言ってるのかなあ？」って。

大人はみんな庭でずっと真剣に聞いているから、私たちも色々言いながら聞いてはいたんです。

そしたら「戦争負けたんだってよ」っていう話をしていた大人がいたんですよ。みんな驚いて。

軍の様子とか軍の動きを知っていて「きっと負ける」って思っていた人はたくさんいたんですよ。

「負けたんだってよ」って、みんなポカンとしていましたね。私ももちろんわからない。

大人の話聞いて初めて「戦争負けた・・・？」って。

今までずっと「負けた」「負ける」なんて言っちゃいけない、禁句。大人が言ったら特高警察が来て逮捕ですよ。だから言っちゃいけない言葉。

だから「負けた？どういう風になってるんだろ？」って意味がわからなくてね。

しばらくしてまず頭に浮かんだのは「負けたってことは、もう戦争やらないってことなのかな。私たちは殺されちゃうのかな」って事が一つありましたね。

外国の人を見たことないから「アメリカ人ってどんな人なんだろう？怖いのかな？殺されちゃうのかな？」そういう恐怖。

それとよく考えたら「負けたんだから、もう日本をやっつけることはないだろうから、今までのように、B 29 が飛んできて爆弾落とすこともないのかな？」ってその二つのことを思いましたね。

そのうちにいろんなところから噂が流れてきて、女の方は連れてかれちゃうとかそういう類の話ね。それと変なことするとどっかに引っ張ってかれちゃうとかね。すごい怖い顔をした背の高い人もいるとかね。いろんな噂がいっぱい流れたわけ。

テレビはないし、ラジオは焼けちゃってないし、情報源がなくて。新聞は来てたかな？でも新聞は5年生だったから読まなかったんですよ。

だから今動いている日本の社会の現実には伝わってこない。先生が教えてくれるわけでもないし、家族が教えてくれるわけでもないし。

「怖い、これからどうなるのかな・・・」と。「アメリカ人が日本に来るんだってよ」「いっぱい上陸してくるよ。上陸してきたら、殺すんだよ」って言っている人もいたのね。

「怖い」という感情と、「爆弾から逃れられるんだな」って安心。その2つが交錯していました。

戦争が終わって、生活はどう変わりましたか。

戦後、最初に2学期になって学校に行ってやりなさいと言われたことはね、「教科書を持ってきなさい」って。算数なんかそういうのじゃなくてね、道徳みたいな教科で修身っていうのがあったんです。あと、5年生だから社会っていうのはないけど、歴史の教科書があったのね。そういうのをみんな持ってきなさいって。

「硯と墨を出しなさい」って言われて墨をすって。

「何をやるだろう?」と思ったら、先生が「何ページを開けなさい。何行目から何行目までは、墨で書いてある文章を全部塗りつぶしなさい」って。

「なんでこんなことするのかね」って、先生は説明しないからわからなくて。

全部一冊やってね。国語やって修身で二宮尊徳とか色々ありますよね、そういうのも全部やってね。教科書の墨塗り。そういう風にさせられたこと、それが一番すごく変わったこと。

「なんで昨日まで読んでいたのを消さなければいけないのかな?」っていうことでね。

でも先生は何も仰らないで「塗って見えない、読めないようにしなさい」と。

今のように、子どもも納得するような、理解するような、そういう説明というのはないわけ。戦中からもう結論ありきで。

それが一番最初にやったことで、終戦によって変わったことですね。

そこはもう勉強はしないんだよ、だからそのままいいよ、そんなことを一番最初やりましたね。

あとはね、やっぱり環境が変わったわけでしょう?

戦争中は、とっても怖い死ぬかもしれないという思いで毎日生きてたわけですよ。死にたくないから、防空壕とか色々なところに逃げていたわけでしょ。

だけどもうそれはないということで、すごく心が解放されて伸び伸びと遊べた。友達と大声で喋ったり遊んだり、心の面でね。それはすごくありましたね。

もう一つはね、学校焼けちゃったでしょう? 勉強する場、学習の場がないわけですよ。

都賀小学校は神社の隣に気球連隊の兵舎があったり、そこに気球を格納する大きな倉庫が、当時二つ並んでたんですね。

校舎がない、で軍隊は解散したから(倉庫には)誰もいないわけね。

だから、5年生の2学期からは学校じゃなくて気球連隊の倉庫で勉強しました。

格納庫が広いからベニヤ板みたいなものでいくつかに仕切って、その一角を教室にして、勉強しましたね。

大変困りました。反響がすごいんです。隣の先生の仰ってること、こちらの仰ってることがお互いこたましあつてね。

だけど建物が大きいし、広いからもう子どもたちはのびのびとして。空襲もないしね。先生も細かいこと仰らなかつたから、もう遊び呆けていましたよ。

精神的に「空襲だ、空襲だ、逃げろ。先生の言うこと絶対だ」って、そういう形にはめられた怖い存在の中からね、みんな解放されてのびのびしていたな—っていうのが戦後。

私は中学3年終わるまで学校の校舎というところで勉強したことはない。

中3の卒業式も今の轟町に経済大学がありますよね、あの辺の軍隊の建物でした。

理科の実験室はない。家庭科室はない。体育だってマットはない、跳び箱はない、鉄棒はない。そんな施設がないところで3年間過ごしました。体育はドッジボールだけです。

それから当時ダンスがすごく流行ってて女の先生の体育の授業の時はいつもダンスでした。

私は中3まで義務教育はすべて軍隊で勉強しました。

高校に入って、初めて化学の実験室や、生物学の教室とかいろんな専門の部屋があって、そういうところで初めて「ああ、ピーカーってこんなのか？」って。高校1年生ですよ？

「メスシリンダーってこうやって見るのか」とかね。「アルコールランプどうやってつけるの？こうやってつけるんだ？下から上に？」って、高校で勉強したんですよ。

でも友達と思いっきり遊んだししゃべったし。先生もないはないなりに、親切に丁寧に、色々教えてくれて。優しいところは優しい、厳しいところは厳しいっていう、すごくいい先生だったんです。

だけどやっぱり貧しかった。戦争が終わって怖くはないけども、貧しい環境の中で耐えて耐えて。

中学生の時、私は下駄履いて学校に行っていました。中3の卒業式の頃に初めて運動靴というのを買ってもらいました。高校に行かなきゃいけないから、親もわかっていたから運動靴とか革靴を買ってくれました。

それから中学の時にはね、どこから頂いたのかな？セーラー服を着ていたんですよ。私は白いネクタイをしていたんだけど、ちゃんとしたセーラー服用のネクタイでなくて、変な形なんです。何だろうなと思ったらね、軍が使う落下傘を適当な大きさに切り抜いたのを誰からわけてもらって、それをセーラー服に結んで、それで学校に行っていました。

とにかく、いろんなことが180度転換して、のびのびとして自由で良い面もあるけども、学校に必要な、学ぶのに必要なものがなくて、物質的な貧しさがありました。なんといっても食べ物がなくて。給食がなかったら中学生でも弁当なんです。弁当持って来れない人もいました。

そういう物質的な貧しさというのは義務教育終わるまでずっと続きましたね。

私3年まで下駄ですよ、学校に行ったら毎日。体育は裸足。下駄じゃできないからね。

今の子どもたちへ伝えたい思いはありますか。

今ね、世界の中の主な国(日本も含め)はすごく豊かでしょう？

自分のやりたい事や自分の生き方をうまく活かせていろんなことで活躍してるでしょ？

すごく豊かで平和でいいんだけど、今の若い人、戦争も76年前だから60代ぐらいから下の方は戦争体験してないからね。戦争ってどんな感じだったのかなってことがわからない。ましてや子どもはね、生まれた時からテレビがあるし、小学生がスマホを使ってるしね。子どもは今の生活が当たり前って多分思ってるんですよ。

こういう大変な事(戦争)ってというのがあったのかな？それもよく分からない。

私が学校に行って戦時中の話をした時、「自分はそんなになっても、うまく生きていけるのかな？」「そんな時代に生まれなくて良かったなー」って子どもたちは感想としてよく言ってくれます。

当たりの、今の平和で豊かな生活が必ずしも100%肯定できるとも言えないけど、でもそれはやっぱり人間が生きていく上で、基本だから。豊かさとは平和っていうのはね。

これを崩したくないという思いは、私は自分の体験からずっと持ってるわけね。

この状況が日本はもちろんのこと、世界中のどの国でもこれからずっと続いてほしい。今そこまで行っていないちょっと貧しい国がありますよね。そういう子も含めて豊かで平和で人間らしく生きられる、大きな言葉で言えば地球・世界になってほしいというのが一番の願いね。

でも、それは私が思っているかもしれない。だから、これから若い人にそういうことを伝えていかなければいけない。

去年はコロナで行けなかったんですけど、学校に(講演に)行く時は話しているんだけど、「あなた達は若い人はね、これから21世紀、もしかしたら22世紀まで生きる人もいるかもしれないね。その自分の生きていく中で、ただ自分が豊かで平和であればいいじゃなくて、それをさらに自分の次の世代、あるいは50年後100年後までを見据えて、今の状態が続くように努力してほしい」、ということを子どもたちに言っています。

「自分さえよければいいじゃなくて、平和で豊かな国・社会を作るのに自分は何をしたらいいのかな」って。

「自分には、スマホもある、洋服もある、美味しい食べ物もあって、何にも困ることはない。それで満足じゃだめなんだよ。皆さんがそういう生活ができるように、50年後も100年後もそういう生活ができるようにするにはどうしたらいいかな？一人一人が自分の心で、小学生は小学生なりに、大人になったら大人になっただけに、考えて欲しい。考えたらできることを見つけて行動してほしい。そういうことを皆さん一人一人が、例えば日本では日本の若い人がみんなそういう思いで未来に向かって生きていけば、きっと平和は続くんじゃないか。

何をするかは自分で考えてくださいね。